

英語語法文法学会 第 32 回大会資料

日 時： 2024 年 10 月 19 日（土）

開催校： 大阪公立大学 杉本キャンパス

住 所： 〒558-8585

大阪市住吉区杉本 3 - 3 - 138

(<https://www.omu.ac.jp/about/campus/sugimoto/>)

順路：

■ 新大阪駅から

JR 阪和線にて約 1 時間、「杉本町(大阪市立大学前) 駅」下車、東口すぐ

Osaka Metro 御堂筋線にて約 1 時間、「あびこ駅」下車、4 号出口より南西へ徒歩約 15 分

■ 関西国際空港から

JR 関空快速にて約 1 時間(堺市駅で各停に乗換)、「杉本町(大阪市立大学前) 駅」下車、東口すぐ

英語語法文法学会

The Society of English Grammar and Usage

September 2024

英語語法文法学会 第 32 回大会プログラム

大会参加費：学会会員 1,000 円／当日会員 一般 2,000 円 学生 1,000 円

日 時：2024 年 10 月 19 日（土）

＜当日は大学の食堂が利用できません。各自、昼食のご準備をお願いします。＞

開 催 校：大阪公立大学 杉本キャンパス

住 所：〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

(<https://www.omu.ac.jp/about/campus/sugimoto/>)

開 催 校 委 員：山本修

大会実行委員：吉川裕介（委員長）、山岡洋（副委員長）、住吉誠、出水孝典、
中澤和夫、吉田幸治

- 司会者・関係者（ワークショップ・研究発表・シンポジウム発表者）控え室
(全学共通教育棟 1 階 814 教室)
- 大会本部・運営委員会室（全学共通教育棟 1 階 816 教室）
- 一般休憩室（全学共通教育棟 1 階 811 教室）
- 書籍展示（全学共通教育棟 1 階 811 教室）

受 付：10 時 00 分より 全学共通教育棟 1 階

ワークショップ（全学共通教育棟 1 階 813 教室） 10:30 – 11:45

司 会 村上まどか（実践女子大学）

1. 「It is time 関連表現と補文形式に関する一考察」…………… 寺山里穂（金沢大学大学院）
2. 「動詞 name に後続する前置詞」…………… 桑名保智（旭川医科大学）
3. 「英語の自由関係節における補文標識の出現について」…………… 松山哲也（和歌山大学）
4. 「英文和訳で現れる逆接表現 — Hercule Poirot's Christmas を例に」
…………… 田岡育恵（大阪工業大学）

受付：12時30分より 全学共通教育棟1階

研究発表 13.00 – 14.45

第1室 (全学共通教育棟1階 813教室)

司会 須賀あゆみ (奈良女子大学)

1. 「英語における周縁的後位修飾表現の諸相」 高松龍 (東京大学大学院)
2. 「範囲指定要素を強く要求する *ly* 副詞：物理的な位置を示す *centrally* を手がかりにして」
..... 松田佑治 (名古屋学院大学)
3. 「動詞 *work* の語義と語彙アスペクト」 出水孝典 (神戸学院大学)

第2室 (全学共通教育棟1階 812教室)

司会 堀田優子 (金沢大学)

1. 「*make* 複合他動詞構文における節目的語外置の際の形式目的語 *it* の有無について—コーパス調査と *constructional contamination* に基づく分析—」 木村快 (慶應義塾大学大学院)
2. 「主語位置の *it* が提示する状況描写の談話役割に関する一考察 — 小説のチャプター冒頭に着目した比較調査を基に—」 山本茉莉 (同志社大学大学院)、山内信幸 (同志社大学)
3. 「*that* 節を従える NP *be raised* の諸特徴」 徳永和博 (東京農業大学)

総会 (全学共通教育棟1階 813教室) 15.00 – 15.20

総合司会	西脇幸太 (岐阜聖学学園徳大学)
開会の辞	会長 吉良文孝 (日本大学)
学会賞・奨励賞選考報告	会長 吉良文孝 (日本大学)
事務局報告	事務局長 松原史典 (京都女子大学)
会計報告	会計 小澤賢司 (日本大学)

シンポジウム (全学共通教育棟1階 813教室) 15.35 – 17.45

テーマ 「*To* 不定詞構文をめぐる現象」

司会 松原史典 (京都女子大学)

1. 「*It is Adjective of NP to VP* 構文における *To* 不定詞節の意味的・統語的特質」
..... 松原史典 (京都女子大学)
2. 「*To* 不定詞を伴う擬似法助動詞の語法 — *be about to, be going to, be to* を中心として—」
..... 佐藤健児 (日本大学)
3. 「*Tough* 構文における *To* 不定詞補部の意味的・文法的特質」
..... 澤田治美 (関西外国語大学名誉教授)

閉会の辞 山本修 (大阪公立大学)

懇親会 18.00 – 19.30 野のはなハウス (学術情報総合センター1階)
(懇親会費：一般5,000円 学生3,000円)

ワークショップ（全学共通教育棟 1 階 813 教室） 10.30 – 11.45

司会 村上まどか（実践女子大学）

it is time 関連表現と補文形式に関する一考察

寺山里穂（金沢大学大学院）

本発表では、high time のような修飾語を伴う it is time 関連表現を取り上げる。it is time 関連表現は、(1a,b) のように to 不定詞や that 節を補文にとる。

(1) a. It is time, and high time, to pull up. (OED, 1883)

b. It is high time licensing hours were trimmed back to no later than 10pm each night. (OED, 2007)

本発表では、it is time 関連表現の修飾語が強調する意味の側面の違いによって、共起する補文形式が異なるのではないかと仮定し、it is time 関連表現の種類と補文形式の選好との関係性を明らかにすることを目的として行ったコーパスに基づく調査結果を報告する。本調査は、COCA と COHA を用いて to 不定詞や that 節を補文にとる 8 種類の it is time 関連表現について行ったもので、その中には、(2) のような、OED には記載されていない past を修飾語に伴う例も含まれる。

(2) Now it is time - in fact, it is past time, to move on. (COCA)

本調査の結果や収集した事例から、補文に to 不定詞を選好するか、あるいは that 節を選好するかには、修飾語によって喚起される it is time 関連表現の意味の違いが関係していることを仮説として提示する。

動詞 name に後続する前置詞

桑名保智（旭川医科大学）

本発表は動詞 name に後続する前置詞について考察する。以下の (1) の辞書記述と (2) の実例（米国のウェブサイトから引用）を出発点とする。

(1) name O1 after (米 for) O2: O1 <人・物など> に O2 <人> の名を取って名前をつける

(『ジーニアス英和大辞典第 6 版』)

(2) Types of cancer are usually named for the organs or tissues where the cancers form.

(<https://www.cancer.gov/about-cancer/understanding/what-is-cancer>)

(1) と (2) は一見すると、米国英語では after ではなく for が排他的に生起すると思われるかもしれない。しかし実際は after も for も可能であり、両者の選択には意味的要因がある可能性を先行研究は指摘する。

本発表では O1 の有生性に着目し、コーパス調査及びインフォーマント調査を行った。電子コーパスで収集したデータは受動態の文で、文主語 (O1) を 3 人称単数代名詞に限定した。分析結果は、文主語が有生の場合は前置詞 after が統計的に有意に選択されることを示した。インフォーマント調査でも同様の結果が得られた。以上の結果を踏まえ、その理由を考察する。

英語の自由関係節における補文標識の出現について

松山哲也 (和歌山大学)

標準英語の(制限的)関係節は、二重詰め COMP フィルター (Doubly-Filled COMP Filter (DFCF)) の効果を示すが (*the man who that I met)、自由関係節の中には、DFCF が適用されないように見える例が存在する。

(1) a. I'll go to whatever gigs (that) you go to. (Radford 2016: 466)

b. You can read whatever books (that) are on the table. (Caponigro 2018: 363)

Donati and Cecchetto (2011) は、上記の自由関係節を制限的關係節の一種であると分析しているが、この分析では、that の随意性が説明できない。例えば、制限的關係節では、主語が関係節化した場合に that が必要であるのに対し (You can read any book *(that) is on the table.)、自由関係節では (1b) のようにその種の制限がないという点が挙げられる。本発表では、Seppänen and Trott (2000) を踏まえて、(1) のような自由関係節は、it 分裂文を基底として、it とコピュラが削除されることで派生すると主張する。

(2) I'll go to [whatever gigs]_i; it_i is _{t_i} that you go to.

発表では、(1) の構文が、it 分裂文と同じ制約を受けることを示すことで、it 分裂文との関連性を裏付ける証拠を提示する。

英文和訳で現れる逆接表現 — Hercule Poirot's Christmas を例に

田岡育恵 (大阪工業大学)

(1) のように、英語で書かれた小説の原文には逆接表現が用いられていないのに、和訳で逆接表現が用いられることがある。下線は筆者による。

(1) Mr Lee never cared for Mr Alfred much. A pity, when Mr Alfred always seemed to devote to his father.

(リー氏は、アルフレッド氏のことをあまりかまわなかった。お気の毒に—アルフレッド氏はいつもお父様にあんなに献身的であるのに。)(アガサ・クリスティー『ポワロのクリスマス』、村上啓夫訳)

(1) では、前件と後件が対照的な状況で逆接関係が認められ、「のに」の使用は適切である。英語原文にはない逆接表現が和訳で用いられる理由としては、このような逆接関係の明示以外にも、発言の断定性の緩和、話題導入の唐突性の緩和、逆接に殊更に注目するかどうかということが考えられる。発表では、英語原文にない逆接表現が和訳に用いられるのは何故なのかについて、Agatha Christie の Hercule Poirot's Christmas とその翻訳『ポワロのクリスマス』を事例に考える。『ポワロのクリスマス』には村上啓夫訳と川副智子訳があるが、村上訳では逆接表現が多く用いられ、川副訳ではその数がかかなり減って原文に近い形になっている。逆接表現の有無がどのようなニュアンスの違いになるのかについても考えたい。

英語における周辺の後位修飾表現の諸相

高松龍 (東京大学大学院)

英語の後位修飾表現 [NP X] (X=後位修飾表現) は、例えば John glanced at the watch (which/that was on the table) のように、[NP who/which/that be X] と定形の関係節で書き換えられる例が典型的と考えられる (cf. 八木 2008)。しかし、関係節での書き換えが不可という点で周辺のと言える後位修飾表現の存在が Chomsky (1970) や八木 (2008) で指摘されている。例えば、(1a) 下線部の修飾対象は意味上文脈から導かれる人物であり、直前の night ではない。

- (1) a. The thought of a cold, uncomfortable night alone on the hillside did not particularly worry him.
(BNC; 八木 2008: 43)

- b. The patient begins with an account of a trip wearing sandals “that weren’t very supportive.”
(J. Heritage and S. Clayman, Talk in Action)

本発表では、周辺の後位修飾表現 (Peculiar Postmodifiers: PPMs) を「定形の関係節での書き換えが不可な後位修飾表現」と定義し、まず (i) PPMs が被修飾部に対して表す意味関係、(ii) PPMs が被修飾する名詞の種類、(iii) PPMs として機能し得る X の可能な種類を記述し、従来観察されていたよりも (ii)、(iii) が多岐に渡ることを指摘する。続いて、PPMs が認可される要因として、被修飾部名詞のコトとしての解釈が関係することを主張する。

範囲指定要素を強く要求する ly 副詞：

物理的な位置を示す centrally を手がかりにして

松田佑治 (名古屋学院大学)

福安 (1988) や大室 (2012) が指摘するように、少数の副詞は補部をとることがある。例えば、「一致、交互、類似、比較、相違、派生、同等、同一、拡張、選択、類似」など、論理的に二つの項を必要とする副詞が挙げられる。しかし、物理的な位置を示す ly 副詞の中にも、補部を要求する副詞が潜んでいる。特に、centrally は、範囲指定要素を明示的に含んでいる globally や locally とは異なり、単独では使えない。よって、centrally は範囲指定要素 (あるいは補部) を強く要求することが分かる。

- (1) a. The company employed about 1,000 people globally.
b. *The company employed about 600 people centrally.
c. The company employed about 100 people locally.
(2) a. John put his plate in the center.
b. ??John put his plate centrally.

本発表では、まず「1. 表現の固定度」「2. 範囲指定要素の明瞭化」「3. 意味の多様性」の観点から、(1b) と (2b) が容認されない理由を分析する。また、大室 (2012) で指摘されている、文頭で生起する文副詞 differently に注目し、補部を伴うことが義務的と考えられる副詞の共通特性を示す。

動詞 work の語義と語彙アスペクト

出水孝典（神戸学院大学）

動詞 work は基本的な意味として「働く」を表わす非能格動詞で、語彙アスペクトに関して言うと、非完結的な動詞、つまり Vendler (1957) の動詞分類で言うところの Activity だとされてきた。しかしながら、動詞 work が表わす語彙アスペクトに関する判断には、語義の違いによって変化するという興味深い特徴が見られる。本発表では、動詞 work の基本的な「働く」という意味ではなく、「〈薬などが〉効く」「〈計画・方法などが〉うまくいく」という効果が生じることを表わす語義で in 句と共起した場合に、容認度が向上するという興味深い事実を提示する。そしてそれを、Engelberg (2002) が英語動詞 work に対応するドイツ語動詞 wirken の同様の振る舞いを説明するのに用いている、「先行事象に関する前提」(a presupposition about a preceding event) という概念を援用することで説明する。さらに、英語においてこうした説明が妥当であることを、実例でそうした語義が用いられ、先行事象が言語化されているものを提示することによって実証する。

第2室 (全学共通教育棟1階 812教室)

司会 堀田優子（金沢大学）

make 複合他動詞構文における節目的語外置の際の形式目的語 it の有無について

-コーパス調査と constructional contamination に基づく分析-

木村快（慶應義塾大学大学院）

本発表では「make 複合他動詞構文における節目的語外置の際の形式目的語 it の生起」を対象の現象とする。規範的には義務的であると見做されている it の生起だが (Huddleston & Pullum (2002) など; (1))、コーパスには、make X clear を除いて、(2) のような、it が生起しない形（「it 無し」形と呼ぶ）の事例が少なくない。本発表では、コーパス調査によって当該構文である make と（目的語補語としての）形容詞の組み合わせの「it 無し」形の使用実態を明らかにした上で、組み合わせごとの「it 無し」形の事例の産出しやすさの要因について、constructional contamination 理論 (Hilpert & Flach 2022 など) を援用して考察をする。より具体的には、「it 無し」形における make と形容詞の組み合わせごとの産出しやすさは、(3) のような、それぞれの組み合わせの「it 無し」形と形式が部分的に一致する、複合他動詞構文における（節ではなく）句目的語と目的語補語の倒置形の頻度に大きく依存していることを示す。

- (1) [...], making it explicit that not all of the connotations actually apply.
- (2) First, it made explicit that Kenya will remain a multiparty republic.
- (3) He can make explicit the thinking processes he uses to synthesize the associated text. (全て COCA)

主語位置の *it* が提示する状況描写の談話役割に関する一考察 —小説のチャプター冒頭に着目した比較調査を基に—

山本茉莉（同志社大学大学院）、山内信幸（同志社大学）

一般的に、物語が展開する時や場所など、状況に関する情報は、物語冒頭で描写される。このような状況描写には、(1) のように、様々な表現が使用される。

- (1) a. *It was the dreary night.*
b. *A man arrived on the dreary night.*
c. *The night was dreary.*

(1a) の主語位置に生起する状況を表す *it* は、日本の学習英文法の枠組みでは、一般的な人称代名詞 *it* の用法とは区別され、指示対象を持たず、文法的な主語位置の埋め合わせという記述が与えられてきた。一方で、これらの *it* は、一般的な人称代名詞 *it* と同様、類似の指示機能を有し、語り手による周囲の状況指示と捉える先行研究も存在する。このような体験的な事態把握を「主観的把握」と証する池上 (2011:52) の記述に倣い、本発表では、主語位置に *it* を伴う状況描写を「主観的状況描写」と呼び、ここには、感情極性値を持つ表現、つまり、語り手の主観を含んだ表現が伴われる傾向が高いという仮説を立て、小説チャプター冒頭に用いられる (1) のような状況表現を比較し、「主観的状況描写」が果たす談話役割を考察する。

that 節を従える NP be raised の諸特徴

徳永和博（東京農業大学）

内容節（以下、*that* 節）を取る動詞類として、*say* などの発話動詞、*think* などの態度動詞が挙げられるが、NP be raised という受動態の形式が *that* 節を従える場合がある。

- (1) I was raised that God was a magician, he was a protector. (2018/11/05: TIME: 67)

本発表では、(1) の下線部のような *that* 節を従える NP be raised の事例を分析対象とし、(2) の問題について検討する。

- (2) i. NP be raised と *that* 節の間には何が省略されているのか。
ii. (1) の表現形式はどのような動機づけで使用されているのか。
(2) を検討する中で明らかになった (1) の諸特徴に触れるとともに、特に本発表の主張として、(2i) については“null say”や日本語の引用述語省略現象と同じく、補文標識との間に適切な動詞句 ((1) は態度動詞) が読み込まれることを指摘する。(2ii) については、インフォーマント調査やコーパスデータを踏まえながら、証拠性表現として機能していることを主張する。

シンポジウム (全学共通教育棟 1 階 813 教室) 15.35 – 17.45

テーマ 「To 不定詞構文をめぐる現象」

司会 松原史典 (京都女子大学)

To 不定詞を主節述語から切り離して独立的に観察するだけでは、文法的な時制が示されないため、その事象 (行為/状態) がこれから生じる事象であるのか、既に生じた事象であるのか、それとも今生じている事象なのかが不明である。さらに、to 不定詞の主語や述語動詞の選択についても、どのような文法的・意味的制限があるのかも分からない。しかしながら、to 不定詞がある主節述語の補部として選択されて構文化されると、その構文特有の多様な現象が見られ、主節述語との関係によって、上記で指摘した to 不定詞の事象時や主語/述語選択などの文法的・意味的特質が決定される。こうした文法的・意味的特質を解明することが、本シンポジウムの目的である。

本シンポジウムでは、次の3つの to 不定詞構文をめぐる現象について、先行研究にはない新たな分析と提案を行なう。まず、松原講師が It is Adjective of NP to VP 構文、佐藤講師が擬似法助動詞の be about to, be going to, be to、そして澤田講師が tough 構文について論じる。

It is Adjective of NP to VP 構文における To 不定詞節の意味的・文法的特質

松原史典 (京都女子大学)

本発表は、評価形容詞が生起する It is/was Adjective of NP to VP 構文に焦点をあて、構文自体の機能を明らかにし、to 不定詞節が示す事象時と文法形式について、インフォーマント調査に基づいた新たな分析を提示する。特に、現在時制 (It is...) の場合の to 不定詞節の事象については、「既に行われた行為」を表すと解釈するのが定説であるように思われるが (安井・安井 (2022) など参照)、実際には「まだ行われていない行為」や「現在行われている行為」を表すことも可能であることを実証する。また、単純不定詞 (to + V) と完了不定詞 (to + have V-en) の両者の意味解釈と文法形式の相違および to 不定詞節主語の意味役割についても議論する。さらに、*Of Harry it was careless to leave the door unlocked. vs. For Harry it was difficult to swim across the river. に見られる文法性の相違を説明するために、of の統語範疇を明らかにし、of NP が一種の極性表現であることを提案する。また、How kind of you to take so much trouble (*it is)! の it is の有無による文法性の相違を説明するために、it と to 不定詞節との統語関係についても考えたい。

To 不定詞を伴う擬似法助動詞の語法
—be about to, be going to, be to を中心として—

佐藤健児（日本大学）

本発表では、to 不定詞を伴う擬似法助動詞（準助動詞）の意味に関する問題を取り上げる。扱う表現は、(1) be about to (BAT)、(2) be going to (BGT)、(3) be to (BT) の3つである。

(1) に関しては、近接性の問題を取り上げる。具体的には、BAT が、BGT とは異なり、tomorrow や next week などの時間副詞類とは共起しないとされる理由について、両者の本質的意味や近接性の含意の違いをもとに説明する。また、BAT が比較的遠い未来の状況に言及することがあるという言語事実に対して、相対的・心理的近接性の観点からそのメカニズムを解明する。

(2) に関しては、条件文の帰結節における文法性の問題を取り上げる。一般に、BGT は、will とは異なり、条件文の帰結節には生じにくいとされる。しかし、実際には、条件文の帰結節に BGT が生じた例は数多く存在する。ここでは、条件文の帰結節における BGT の生起条件を、条件節と帰結節の因果（時間）関係・呼応関係の観点から明らかにする。

(3) に関しては、BT の本質的意味と各用法（特に「予定」「命令・義務」「運命」用法）が導き出されるメカニズム、または、「可能」用法と未来性の関係について考察する。

Tough 構文における To 不定詞補部の意味的・文法的特質

澤田治美（関西外国語大学名誉教授）

Bresnan (1971) は、Tough 述語の tough が用いられた以下の例 (1) で、a 文は適格だが、b 文は不適格であるとした。tough は、その補部として、a 文では to 不定詞句を、b 文では for 不定詞節を取っている（それゆえ、不適格）。

(1) a. It will be tough for at least some students [to be in class on time].

b. *It will be tough [for there to be at least some students in class on time].

(a-b: Bresnan (1971: 264))

(1b) に対して、Berman and Szamosi (1972) は、次のような反例を挙げた。

(2) It will be tough for John [for there to be another child in the family].

(Berman and Szamosi (1972: 321))

これに対して、Lasnik and Fiengo (1974) は、(2) の “tough for” は、(3) の “tough on” に等しいことを指摘し、述語の補部選択に関する新たな分析法を提示した。

(3) [For Joe Namath to break his leg] would be tough on him. (Lasnik and Fiengo (1974: 561))

本発表では、「意味的二重性」の概念を提案し、「Tough 述語制約」、「Tough 構文の主語指定制約」、「Tough 述語制約からの解放」、「補部選択とモダリティとの相関性」といった制約や現象について論じてみたい。

英語語法文法学会役員

名誉顧問	八木克正	安井 泉	内田聖二	
会長	吉良文孝			
事務局長	松原史典			
会計	小澤賢司			
会計監査委員	吉川裕介			
運営委員	五十嵐海理	大澤 舞	大竹芳夫	金澤俊吾
	吉良文孝	住吉 誠	出水孝典	中澤和夫
	西脇幸太	前川貴史	松原史典	村上まどか
	山岡 洋	山本 修	吉川裕介	吉田幸治
編集委員	大竹芳夫 (編集委員長)			
	大橋 浩	大室剛志	金澤俊吾	吉良文孝
	須賀あゆみ	滝沢直宏	中澤和夫	中山 仁
	西田光一	野村忠央	林龍次郎	松村瑞子
	家口美智子	山岡 洋	吉田幸治	

発行日	2024年9月16日
編集・発行	英語語法文法学会
代表者	吉良文孝
事務局	〒605-0927 京都市東山区渋谷通り東大路東入ル3丁目上馬町 544 京都女子大学文学部英語文化コミュニケーション学科 松原史典 研究室内 TEL : 075-531-9082 (内線) FAX : 075-531-9120 (代表) Email : segu.office@gmail.com URL : https://segu.sakura.ne.jp
振替口座	02260-0-70393 英語語法文法学会
	© 英語語法文法学会